Osaka University Knowledge Archive

Title	第5章　〈 恋愛伴侶規範〉の限界と新たな関係性構築の可能性 ： 婚外恋愛ドラマ『昼顔』のヒットからみえるもの
Author(s)	岡田, 玖美子
Citation	フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想. 2022, p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88599
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈恋愛伴侶規範〉の限界と新たな関係性構築の可能性
――婚外恋愛ドラマ『昼顔』のヒットからみえるもの――

岡田　玖美子

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程,
日本学術振興会特別研究員（DC2））

牟田和恵 編　フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想　第５章
ISBN 978-4-87974-779-2　C3836

第 5 章　〈恋愛伴侶規範〉の限界と新たな関係性構築の可能性
――婚外恋愛ドラマ『昼顔』のヒットからみえるもの――

岡田　玖美子

1. はじめに――恋愛結婚のその後への社会的関心

恋愛結婚が主流となって久しい今日において婚外恋愛[1]を描いた物語は、未婚者の恋愛とそのゴールとしての結婚を描いた典型的な恋愛物語からすれば、いわば「ハッピー・エンド後の物語」である。本稿では婚外恋愛を描いた『昼顔』のヒットという近年の顕著な現象に着目し、その物語をもとに背後にある夫婦や恋愛関係をめぐる人びとの意識、そしてその変容可能性について考察することが目的である。

山田昌弘が指摘するように、近代家族モデルがもっとも安定的であった高度経済成長期には、結婚後コミュニケーションがなくとも性別役割に従っていれば、愛情があると信じることができた。しかし、高度経済成長期ののち物質的には豊かな生活が実現するなかで、「家庭内離婚」（愛情がなくても家族の形式を守るために離婚できない夫婦）が問題化されるなど、夫婦関係において役割よりもコミュニケーションが重視されるようになった（山田 2005）。そのような背景のなかで、婚外恋愛物語は何を示し、どのように人びとに受容されているのだろうか。

むろん、これまでにも婚外恋愛を描いたテレビドラマは豊富にあった。たとえば、『金曜日の妻たちへ』（1983）の男たちのように結婚生活とは異なる魅力を婚外恋愛に感じつつも、そのことに罪悪感を抱くという、いわゆる性･愛･結婚の三位一体である「ロマンティック･ラブ･イデオロギー」（以下、RLI と略記）からの逸脱を描くものもあれば、『失楽園』（1997）のヒロインのようにそもそも恋愛結婚でなかった配偶者との関係に耐えかねて婚外恋愛に没入していく、「結婚制度」対「恋愛」の構図に該当するものもある。

しかし、RLI については、1980・90 年代ごろから徐々に変容しつつあることが論じられてきた。たとえば、谷本奈穂は、RLI の変形として 1990 年代以降若者では「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」と呼べるものへの支持が高まっていることに注目する。このイデオロギーは、結婚するには恋愛感情が必要で恋愛感情のない結婚は正しくないとするものである（谷本 2008; 谷本・渡邉 2016）。

また、セクシュアリティについても、赤川学が「親密性パラダイム」と名付けたように、1970 年代以降あらゆる性行動の領域において、その当否を判断する基準として「愛」や「親密性」が大きな位置を占めるようになってきた（赤川 1999: 382）。とりわけ 2000 年前後から、「セックスレス」など夫婦間のセックスの欠如が問題として話題となったことからも（パッハー 2019）、夫婦関係においてもますます「愛のコミュニケーション」としての性的充足が重要になったといえる。

このような性・愛・結婚をとりまく社会の変容についての先行研究が示唆することは、夫婦関係における愛情の価値の高まりであり、それは「メンタルな満足」（筒井 2008）の獲得やアイデンティティの維持において夫婦や恋人というカップルの関係性が果たしてきた重要な役割（Jamieson 2004）がより強く求められているとも解釈できる。そのような社会的背景が示唆されるなかで、本稿では 2014 年にテレビドラマがヒットし、それを受けて 2017 年に映画化された『昼顔』の婚外恋愛物語に着目することで、その物語にはどのような意味が読み取れ、そこからどのような夫婦・恋愛関係についての課題や展望が考えられるかについて論じていく。

以下では、まず『昼顔』をとりまく社会的背景とメディア研究における物語論の視座からみた特徴について述べる（2 節）。そして、『昼顔』の物語において重要な描写を挙げながら、その物語には「純愛」として人びとの共感を呼ぶ側面と「純愛ごっこ」として非難されうる側面があることを指摘する（3 節）。その 2 側面の検討からみえてきたことをもとに、E. Brake（2012=2019）の〈恋愛伴侶規範[2] amatonormativity〉概念を援用しながら、成人の情緒安定

化やアイデンティティ維持の基盤となる関係性の構築について議論を発展させる（4 節）。

2.『昼顔』をとりまく社会的背景とその物語の位置づけ

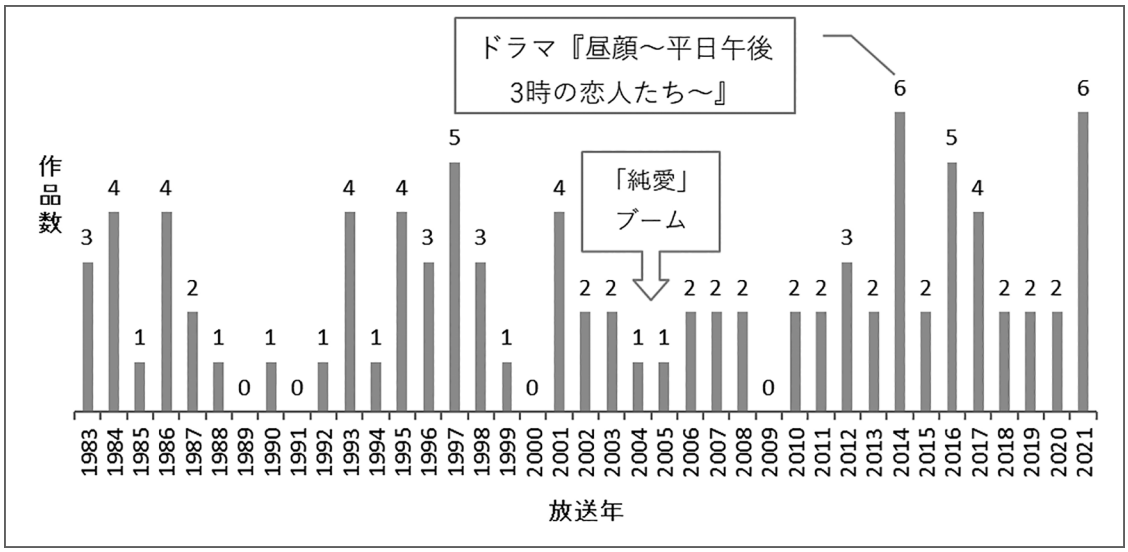
2.1 2000 年代以降のドラマ史における大人の恋愛ドラマとしての『昼顔』

メディア論では「マスメディアのコンテンツと現実の両者は、互いに影響を与え合う関係にある」（中村 2014: 11）と指摘されてきた。すなわち、メディア・コンテンツは、社会で広く共有されている意識や価値観を反映して人びとの支持を得る一方で、現実では体験できない「疑似的現実」や先進的なモデルを時に描きながら、個人の意識や価値観および社会的通念の形成やイメージの共有をも促す（坂本 1997）。とりわけ、1980 年代以降、ドラマを見ることで主婦たちはドラマの中の女性に自分を重ね合わせ、少なくとも主婦としての不満や葛藤が自分だけの問題ではないことを知り得てきたことが指摘されている（国広 2012: 88）。

『昼顔』もこのように社会における既存の意識・価値観を反映するとともに、今後の夫婦や恋愛関係のありようへの示唆となりうる先駆的な要素を内包していると思われる。それらの点に関連して、まず 2000 年代以降の恋愛ドラマの動向を確認しつつ、『昼顔』のテレビドラマ・映画が制作された背景について概要を整理する。

日本のテレビドラマの動向については、すでにまとめたもの（岩男 2000; 国広 2012; 岡室 2017 など）があるため詳述しないが、本稿の関心に関連するところでは、1990 年前後に『男女七人夏物語』（TBS、1986）を典型とする「トレンディドラマ」と呼ばれる男女の恋愛を中心にしたライフスタイルを描くドラマが人気を博した時代から、1999 年の男女共同参画社会基本法の成立・施行を経て、2000 年代ごろから『ハケンの品格』（フジテレビ、2007）など職場を舞台としたドラマが増加する時期へと移行してきたという大きな流れがある（国広 2012）。

そのなかで婚外恋愛をメインに描いたテレビドラマ、いわゆる「不倫ドラマ」に対象を絞って動向を整理してみよう。婚外恋愛テレビドラマが初めて社会的に大ブームを引き起こしたといえる 1983 年の『金曜日の妻たちへ』以降の放送年別作品数の動向を図にまとめた（図 1）。大まかな流れとしては、1990 年前後に一度減少したのち、1990 年代に『それでもあなたが好きだった』（TBS、1992）や『失楽園』（日本テレビ、1997）などが話題となった時期を経て、2002 年から 2013 年ごろまで年に 1、2 本と下火になる。その後、2014 年に急増し 2016 年、2017 年も比較的多く、



出典）Wikipedia「不倫を扱ったテレビドラマに関するカテゴリ」のページに記載の作品を集計し、インターネット上で「不倫ドラマ」として紹介されている近年のドラマを補足追加した。

注）民放キー局 5 社系列と NHK で放送されたものであり WOWOW などオンデマンドは除く。また、「月 9」などの連続ドラマだけでなく、単発ドラマや昼帯の 15 分ドラマ等も含む。

図 1　婚外恋愛を主題としたテレビドラマの放送年別作品数の動向（筆者作成）

2021 年も多くなったことがわかる[3)]。

婚外恋愛ドラマが少ない 2000 年代初頭には『冬のソナタ』や『世界の中心で、愛をさけぶ』などの「純愛」ブームがあり（湯浅 2005）、難病など死別に直面したカップルが一途に思い合う恋愛物語が注目を集めた。しかし、2008 年のリーマンショック以後の景気低迷、2011 年の東日本大震災などの社会的に大きな出来事を経て、その後 2010 年代になると、ストレートな恋愛ドラマが受けなくなったという。たとえば、それまで数々の恋愛ドラマをヒットさせてきた、一般に「月 9」と呼ばれるフジテレビの月曜 21 時からのドラマ枠でストレートな恋愛ドラマが視聴率に苦しむようになった（岡室 2017）。なお、2010 年代でも高視聴率を記録したテレビドラマもあったが、最高視聴率（関東地区、ビデオリサーチ社調べ）42.2% の『半沢直樹』（TBS、2013）、同 40.0% の『家政婦のミタ』（日本テレビ、2011）など恋愛ドラマではない（年代流行 2021）。

そうしたなかで、2014 年、フジテレビは「月 9」と並ぶ看板枠でありながら 1 時間遅い木曜 22 時からの「木曜劇場」と冠されるドラマ枠で、より大人向けに『昼顔〜平日午後 3 時の恋人たち〜』を放送した（放送期間 7 月 17 日〜 9 月 25 日）。その平均視聴率（関東地区、ビデオリサーチ社調べ）は 13.9% で[4)]、その年のユーキャン新語・流行語大賞の候補 50 語に「昼顔」がノミネートされるなど話題となった。

公式サイト[5)]によるとタイトルにある「昼顔」とは、同局の主婦をターゲットとした平日昼の生活情報番組『ノンストップ！』で「社会現象になりつつある」として特集された女性の行動に関する造語「平日昼顔妻」に由来する。この造語は、カトリーヌ・ドヌーヴ主演の 1967 年仏・伊合作映画『昼顔』（原題 *Belle de jour*）のヒロインのように、夫が仕事でいない平日昼間に夫以外の男性と恋に落ちる妻のことを指すという。また本作は、この 1967 年の『昼顔』をオマージュしたオリジナル作品であるとされている（フジテレビ 2017）。

テレビドラマの反響の高さを受け、2017 年にはテレビドラマの結末から 3 年後を描いた続編が映画化された（6 月 10 日公開）。映画の興行収入は 23.3 億円（一般社団法人日本映画製作者連盟 2018）であり、テレビドラマの続編としてはヒットしたといえる。

2.2『昼顔』のあらすじと物語論上の特徴

以下、あらすじを簡単に紹介する。テレビドラマ（全 11 話）ではおもに 2 組の婚外恋愛関係が描かれたが、ここでは映画でも継続して描かれる主人公の紗和を含む 1 組に焦点を絞る。

主人公の笹本紗和（31 歳／上戸彩）は、会社員の夫（38 歳）と平凡に暮らす主婦であり夫との関係は概ね良好であるが、セックスレスに悩んでいた。紗和はパート先のスーパーで生物を教える高校教師、北野裕一郎（33 歳／斎藤工）と偶然出会う。次第に惹かれ合った 2 人は互いに既婚者であることから葛藤しつつも、徐々にメールやデートを重ね婚外恋愛関係に至る（1 〜 5 話）。ドラマ後半ではそれぞれの配偶者に 2 人の婚外恋愛関係が発覚していくなかで、一度は婚外恋愛関係に区切りをつける。しかし、夫婦関係での衝突や軋轢により婚外恋愛関係を再開するも、最終的には互いの配偶者と親族による介入、裕一郎の妻、乃里子（34 歳／伊藤歩）の主導により弁護士を交えた話し合いの結果、2 人は二度と会わないという誓約書を交わし関係は終了する。また、紗和は夫と話し合ったうえで離婚し、1 人で生きていくことを決意する。一方の裕一郎は紗和への未練を断ち切り、転職して妻との関係再構築を決める（6 〜 11 話）。

映画は、別れを選んだ 2 人が 3 年後再会し、再び葛藤しながらも婚外恋愛関係に没入していく様子が描かれる。その過程で裕一郎は乃里子との離婚の意思を固め、乃里子は精神的に不安定になりながらも最終的には離婚に同意する。漸く紗和と裕一郎は再婚に向けて準備をしながら穏やかな日々を過ごすようになり、状況を受け入れた乃里子も落ち着いたようだった。裕一郎が乃里子のもとへ離婚届を受け取りにいった際には、乃里子が車で裕一郎を送ると言い車中では冗談も交え談笑していたが、裕一郎の何気ない言葉をきっかけに乃里子は精神的に急に不安定になり、そのまま乃里子が車を暴走させ大きな事故となる。その結果、裕一郎は死亡し紗和は絶望する。一時紗和は生きる気力を失うが生きることを決意し、その後裕一郎との子どもを妊娠していることが判明するという結末である。

メディア上の物語から社会を読み解く際には、その構造、殊に結末と人物設定が重要な観点となる（阿部 1997; 谷本 2008）。これらの点について『昼顔』の物語の全体像に着目すると、以下の 3 点が顕著な特徴として挙げられる。

1 点目は、急転直下の「死」という結末である。全体で約 120 分の作品であり、残り 30 分までは乃里子と裕一郎の離婚、紗和と裕一郎の再婚というかたちで全員納得し、円満解決とはいかないまでもそれなりにハッピー・エンドに至るかと思われた。しかしながら、最終的な結末としては乃里子との夫婦関係を終了させ紗和との再婚を選んだ裕一郎が事故死する。

この関係者の死という結末は、やや古典的といえるかもしれない。1930 年代から 1990 年代までの日本の「不倫」映画の文学的研究によると、60 年代後半から 70 年代には江戸時代の情死事件をもとにした心中物のような衝動的で「血なまぐさい」ある種ドラマ性に満ちた結末が、80 年代から 90 年代にかけては回避されるようになり、誰かの「死」ではなく夫婦の日常生活のなかで時間をかけた解決方法が示されたという。それは、円満解決とはやや異なり、妻が夫の婚外恋愛に苦しみ、さまざまな葛藤を抱えながらも結果的には「夫婦は愛し合うもの」という理想に反しないかたち、かつ妻か婚外恋愛相手、夫婦双方など当事者の誰かが痛手を負うかたちでの解決である（今泉 1998）。この知見を踏まえると、『昼顔』の結末は、1970 年代までの悲劇的なバッド・エンドに逆戻りしたといえるかもしれない。

しかし、草柳千早が指摘したように恋人が死してこの世からいなくなることは、永遠に美しいまま残された者の記憶に残ることを意味し（草柳 2011）、2004 年ごろの「純愛」ブームで多用された物語装置であった。この装置は『昼顔』でも意識されたものであることが、テレビドラマ・映画で『昼顔』の脚本家を務めた井上由美子の言葉からわかる。映画のパンフレットでは、「恋の頂点で断ち切られることは、情熱が萎んで恋が死んでいく瞬間を見なくてもいいことである。その意味で、北野は紗和の〈永遠の恋人〉になった。これも一つの〈ハッピーエンド〉かもしれません。」という井上の語りが掲載されている（東宝ステラ 2017）。

それと同時に、井上は「いわゆるハッピーエンドではありませんが、それは不倫したカップルが幸せになっちゃいけないというモラルのためではありません。若い世代のラブコメが多い中で、報われない恋に人生を賭ける、大人の女性の恋愛映画に浸ってもらいたいと思いました。」と、裕一郎の死という結末をモラルによる「不倫」批判と関連させることを否定している（東宝ステラ 2017）。

『昼顔』の婚外恋愛物語の特徴の 2 点目は、裕一郎の妻、乃里子の理系の大学准教授という社会的地位の高さである。ドラマにおける女性の描かれ方について分析した国広陽子によると、1986 年の男女雇用機会均等法以降「キャリア・ウーマン」がドラマにも登場するようになったが、主役としては仕事もおしゃれもコミュニケーション能力もすべてに有能なリアリティを欠いた理想像が描かれ、脇役としては「嫁ぎ遅れた」ような否定的イメージで描かれやすかったという（国広 2012: 88-94）。

『昼顔』でも、とくにテレビドラマでは、自己主張が強く裕一郎に対しても威圧的で家事を苦手とする乃里子の様子や、乃里子のキャリアアップに微妙な顔をする裕一郎の姿が描かれており、このような乃里子に関する描写・人物設定は、社会階層のうえでも平凡で無邪気で料理上手な女性性に富んだヒロインの紗和と対比的であり、裕一郎が紗和に安らぎや温かさを感じて惹かれることを示している。

このようなステレオタイプなメディア表象は、実社会のジェンダーをめぐる状況ともつながる。実際の婚外恋愛についての計量研究では、夫婦ともに高学歴の場合は男女ともに婚外恋愛をしにくくなる効果がある一方で、男性の場合、自身の収入が上がるか、妻の方が収入が高ければ婚外恋愛しやすくなるという効果が指摘されている（五十嵐 2018）。『昼顔』の設定でも裕一郎は高校教師として紗和に出会い、映画では大学の非常勤講師をしているが、准教授の乃里子のほうが収入は高く、実際の婚外恋愛の動向と重なる。

3 つ目の特徴は、殊に映画において顕著だが、「サレ妻」「サレ夫」と近年一般に呼ばれるような、婚外恋愛している者の配偶者側の立場や心情にも焦点が当てられている点である。具体的には、乃里子、そして紗和の職場の上司、あるいは婚外恋愛しそうになった経験がある紗和の同僚など、さまざまな登場人物が「サレ」た側の視点から痛烈

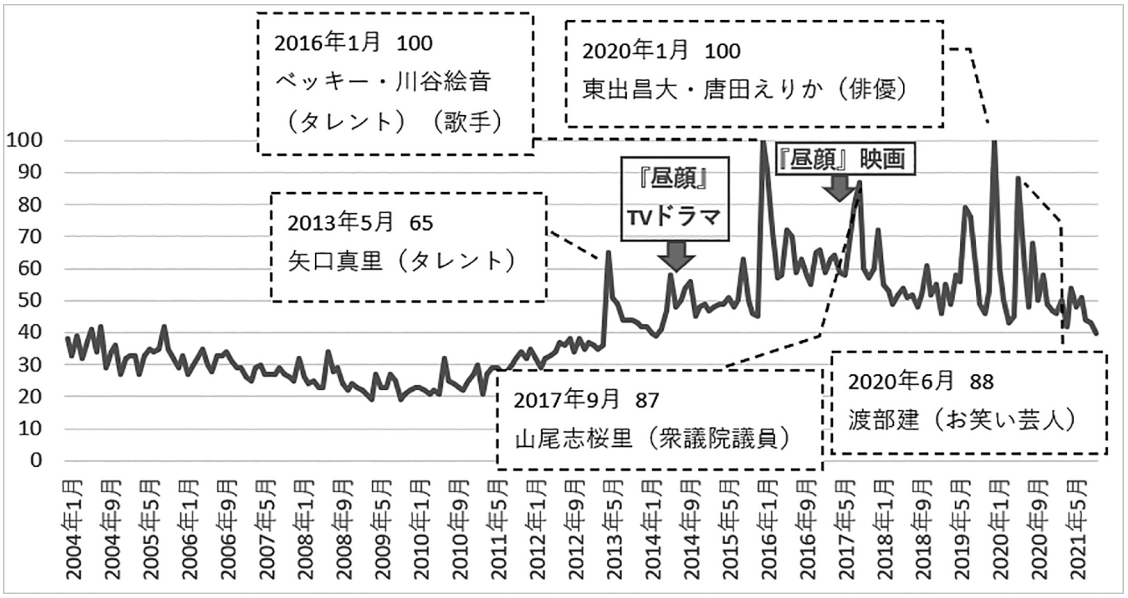


図 2　Google Trends による「不倫」の検索人気度の動向と話題となったトピック
（すべてのカテゴリ、2004 年 1 月～ 2021 年 10 月）（筆者作成）

な批判を紗和と裕一郎に投げかける様子が描かれている。これらの描写により、婚外恋愛に至る「運命の 2 人」の物語というよりも、「サレ」る場合も含めて今日婚外恋愛が身近にありうることを暗示している。

この背景として、ドラマ放送後で映画の制作期間にあたる 2016 年に『週刊文春』に報じられた（いわゆる「文春砲」）芸能人の「不倫スキャンダル」と、それに対する社会でのバッシングの高まりによって、婚外恋愛そのものが身近かつホットなテーマとして改めて社会で注目されるようになったことが考えられる（図 2）。

監督の西谷弘は映画のパンフレットのなかで、2016 年前後から社会で「不倫」への風当たりが強くなっていることに触れ、「ドラマ当初は『不倫、されど純愛』を掲げてきたのですが、映画化にあたって最初に思ったのは『奪われる側の痛み』をどこまで制作者側が意識できているか」で、「その痛みをどれだけ紗和の胸に刻み込めるかがテーマの一つでした」と語っている（東宝ステラ 2017）。要するに、『昼顔』はテレビドラマ放送時点では、婚外恋愛でありながら主婦が夢見る非現実の「純愛」物語でありえたが、映画制作期間での婚外恋愛をめぐる社会的背景の変容により、映画では婚外恋愛関係にある 2 人だけではなく、もう 1 人の関係者である「サレ」た側、そして周囲の視線を描かざるをえなくなった。そして、メイン視聴者である女性たちも単に婚外恋愛に憧れ共感するだけでなく、「サレ」た側の苦悩や葛藤にも感情移入しやすいという複雑な状況におかれることになった。

このような状況をふまえ、次節ではテレビドラマの続編で物語が完結し、より婚外恋愛をとりまく社会の関心が複雑になった、映画における『昼顔』の物語に着目する。その際、関連する特徴的な視聴者の反応として大手映画レビューサイト「映画 .com」の投稿の一部[6] を補足的に取り上げながら（以下、括弧書きで投稿タイトル、投稿日を記載して引用）、より詳しく検討していきたい。

3.「純愛」か、「純愛ごっこ」か――婚外恋愛物語からみえる恋愛結婚のアンビバレンス

3.1「ただ好きで一緒にいたいだけ」という純粋でささやかな愛

映画『昼顔』では、テレビドラマのラストで別れを選んだ紗和と裕一郎が再会し、妻との離婚交渉などの試練を乗り越え、愛を確かめ合う禁断の「純愛」とみることもできる。具体的なシーンでいえば、映画の後半で「そんなの恋じゃない」と婚外恋愛に否定的な職場の同僚に対して紗和が「わたし、幸せになろうなんて思ってません。ただ、

1 日も長く彼と一緒にいたいんです。すみません…えらそうに。」（1:28:25 ～）と述べている。

また、映画終盤で尋常でない様子で運転しながら「どうしてわたしじゃなくてあの人なの？！」と問い続ける乃里子に対して、裕一郎は命の危機を感じながらも「ごめん…わからない…ただ紗和が好きなんだ…」（1:42:58 ～）と答えるシーンが最期の姿である。つまり、前節で指摘したように設定上は乃里子のキャリア志向性と紗和の家庭性の対比が暗示されながらも、その対比は明確な婚外恋愛の要因としては語られない。その代わりに「ただ好きな人・大事な人」と「ただ一緒にいたい」という紗和と裕一郎のシンプルに純化された強い思いが印象的に示されている。

しかもそれは、かつてのトレンディドラマのように華やかでドラマティックなロマンスではなく、好きな人と「ただ一緒にいられる」という日常的でささやかな、情緒的安定に資するものである。その最たる例は、離婚が受理されたら 2 人だけで結婚式を挙げたいと言う裕一郎に対する紗和の反応である。紗和は、「だったら蛍見に行こう。」「ちょうどミルキーウェイでしょ。2 人で乾杯しながら蛍見よ。」と告げ、「それでいいの？」と問う裕一郎に、「それがいいの。」と答える（1:31:05 ～ 1:31:34）。蛍はこの映画において 2 人をつなぐ重要なモチーフとして用いられてはいるが、結婚式という RLI の象徴的な「ゴール」ではなく、あくまで 2 人で過ごしてきた思い出の場所でこれまで過ごした時間、そして今後も一緒に過ごすであろう時間の一部として、いつも夕食の際にしているように乾杯することがより「いい」とされるのである。

そして、このような「理由もなく好き」で「一緒にいたい」という思いの強さが強調された点が以下に示すように 2 人の婚外恋愛関係は恋愛と呼べるという視聴者からの支持につながっている。

> 結婚したら不倫してやる！って思って結婚する人なんていませんよね。でも不倫は誰しもが犯してしまうかもしれない過ちだと思いませんか？どーしよーもないくらい愛してしまった人がただ結婚していたってだけなんです !!! 結婚している人だってそんな相手が現れたら諦めがつかない人だって沢山いるはずです !!! 誰を犠牲にしたって自分の物にしたいと思うのは本能だと思います。この映画は究極の純愛映画だと私は思いました。『たださわが好きなんだ..』と言って、さわの事を思って死んでいった北野先生の表情が忘れられません。（「美しく切ないラブストーリー」、2017/06/20）

このように婚外恋愛を許容しうる背景として、離婚がめずらしくない今日では、結婚後に気持ちが変化したり気持ちを向ける相手が変わったりすることもありうるという人びとの意識が読み取れる。

ただし、『昼顔』では「理由もなく好き」で「ただ一緒にいたい」というささやかで観念的な側面が強調・重視される一方で、性的充足に関してはテレビドラマと映画で描写に変化がみられた。テレビドラマでは、当初紗和は夫とのセックスレスに悩んでおり、そのことも裕一郎との関係に傾く 1 つの要因として描かれていた。しかし、約 2 時間の映画で明確なキスシーンおよびセックスシーンは一度きり、しかも 2 分ほどしかなかった（50:10 ～ 52:20）。このことから、映画では婚外恋愛関係といえども愛情が身体の性的結びつきよりも価値高く優先されるべき条件として描かれているといえる。その結果、以下の視聴者の投稿のように、「理由もなく好きな人とただ一緒にいたい」という関係性がよりプラトニックなものとして受容されたことが読み取れる。

> 不倫といえば、すぐに身体の関係だけの恋愛を思い浮かべますが、昼顔は、ただの肉欲にまみれた不倫映画ではなく、とても美しい純愛映画でした。（「美しい純愛映画でした」、2017/06/22）

> 再び出会う紗和と北野はただ蛍を見て会話もせず肉体関係を持つことも無く一緒にいられる時間を大切に楽しんでいました。この時点でやはり 2 人は心のどこかでずっと思い合っていたと感じました。（「映画だからこそ」、2017/06/26）

3.2「サレ」た側の苦痛と他者を傷つける愛

しかし、2.2 でも言及したように映画では 2 人がいくら純粋に愛し合っていたとしても、それだけでは婚外恋愛を支持できないという周囲の厳しい反応が強調される展開になっていた。たとえば、裕一郎が紗和の職場の上司に対して「そこに大事な人がいれば、どこだって都です。」（1:19:10）と言い切るシーンがあるが、その裕一郎の言葉に対して、上司は「かっこいいね。でも、ちょっとめでたすぎるよ。」と厳しく応じる。この上司は自身も妻の婚外恋愛によって離婚した経験をもつ「サレ」た側であり、紗和にも「お前たちが楽しんでいる裏で、すべてを失う人間がいるってことだよ。そういう人間の痛み、考えたことないだろ。」（1:12:55）などと容赦ない。また、乃里子も紗和と裕一郎の再会に気づいた際には、互いを気にし合う 2 人に対して「純愛ごっこのつもり？」「ばっかみたい。何 2 人で酔ってるの？ばっかみたい！」（41:14）と婚外恋愛の「ロマンス」を自己陶酔にすぎないと糾弾する。

これらの婚外恋愛に対する周囲の描写は視聴者にも重く受け止められている。たとえば、「愛さえあればいいのではないのです。誰かの幸せを壊して手に入れた幸せは、結局最後は崩れちゃうんだなって思いました。」（「すべてはうまくいかない」、2017/07/03）などのように、愛を貫くことで周囲を傷つけるという点で婚外恋愛を否定する投稿が複数みられた。さらに、紗和と裕一郎が互いを思い合う言動についても、「お花畑」「純愛ごっこ」「恋に恋してる感」でしかないなどと、ある種冷めた目線での否定的な意見も目立つ。

そして、この単なるロマンスでは済まされないという婚外恋愛に対する視聴者の視線は、登場人物の描写にも関連する。まず乃里子について、映画では自己顕示欲が強くキャリア志向という設定はやや後景化し、裕一郎のために夕食を準備したり、紗和にお茶を出したりと乃里子の家庭的な描写がみられる。したがって、映画において裕一郎を死に至らしめる乃里子の狂気性の要因としては、本人の性格よりも「サレ妻」としての苦悩が強調されている。

紗和と裕一郎が再会し密会していることを知った場面で乃里子が「結局わたしが悪者になっている…！何も悪いことしてないのに…」（41:19）と泣きそうになりながら悲嘆するシーンでは「サレ」る側の苦悩が端的に示されている。視聴者のレビュー投稿なかには、このシーンを挙げて強く共感する意見があったほか、乃里子を精神的に追い込んだ紗和の身勝手さや幼稚さと裕一郎の残酷ともいえる優しさおよび配慮の乏しさや鈍感さを批判する意見もみられた。

> 紗和と裕一郎、純粋がゆえの二人の無神経さ。離婚してからの紗和の奔放な貪欲さ、北野先生の優柔不断さや不器用さ。それが真っ直ぐな紗和に猜疑心をわかせ余裕をなくし、またのりこを追い込んだと思いました。（「引きずりました」、2017/06/21）

その「純粋がゆえの二人の無神経さ」の乃里子への影響がもっとも明確な描写は、離婚の交渉が長引くなかで裕一郎を信じられなくなった紗和が突然 1 人で乃里子に会いに行くシーンである。ここで乃里子は突然来訪した紗和に「このくらいのいじわる言われたほうがあなたも楽でしょ。」（1:23:34）と若干紗和への悪口を交えつつも、自身は離婚に合意していることを伝える。そのうえで「1 つだけお願いがあるの。」（1:24:04 ～）と切り出し、「離婚しても裕一郎って呼んでいい？わたしたち同じ仕事だからどこかでばったりってこともあるでしょ。」と控えめに頼むが、紗和は少し考えたうえで「それは…嫌です。ごめんなさい。」と拒絶する。その場では紗和の拒絶を受け入れた乃里子だったが、この唯一の願いさえも聞き入れられなかったことが映画終盤の乃里子の暴走へと影響したと暗示される。したがって、この紗和の言動に対しては、視聴者からも「独り占め」「欲張ったらだめ」などと批判する投稿が集中し、乃里子の暴走によって裕一郎が亡くなったことは「因果応報」とするレビュー投稿もあった。

テレビドラマで描かれたことだが、乃里子と裕一郎は学生時代同じ研究室の先輩・後輩として出会い、交際を経た恋愛結婚であった。離婚に向けて乃里子が気持ちを整理する過程では、談笑しあうなど乃里子と裕一郎との関係は良好であることを考えると、これまで築いてきた裕一郎との関係を仕事仲間としてでさえ続けることができなくなった乃里子の苦悩と絶望は容易に想像できる。けれども、一見良好な関係のなかで自殺未遂を図るほど追い込まれて

いた乃里子の苦痛や葛藤に気づけなかった裕一郎は、「裕一郎」から「北野くん」と呼び方を変え紗和との約束を守る乃里子に対して、「ノリ」とニックネームで呼び続けており、懸命に区切りをつけようとする乃里子に対して「無神経」なのである。

また、紗和が乃里子の願いを拒絶した背景について、直前のシーンでは離婚の手続きが遅れるなかで裕一郎との関係に微妙なすれ違いが生じ、「自分が裏切ったことがあると相手のことを信じられない」（1:15:58）という紗和のセリフがあり、婚外恋愛だからこそ顕著な関係構築における暗雲が示されている。そして、口下手で紗和を心配させないために嘘を重ねる裕一郎の不器用さが紗和の不信感に拍車をかけていることが読み取れる。それゆえに、紗和は乃里子と裕一郎が離婚するとしても「余裕なんて全然ない」（1:22:31）と乃里子に吐露する。つまり、『昼顔』の映画では「運命の 2 人」による婚外恋愛の「純愛」が理想的に描かれるだけでなく、婚外恋愛のその後の生活における微妙なすれ違いや不信感が示唆されることで、視聴者たちの夫婦生活にも通じうる生々しさが示唆されている。

3.3「死」という決着と「救い」のニーズ

ここまでの議論をまとめると、3.1 では紗和と裕一郎の関係が「純愛」でありえた要素として、その関係が「ただ好きで一緒にいたい」というシンプルな動機が強調されたことを確認した。しかし、その「純粋さ」は裏返せば「無神経さ」や「幼稚さ」でもあり、それらが乃里子や紗和自身を苦しめるという視聴者の日常的な夫婦生活にも引き付けられる問題が暗に描かれていたことを 3.2 では指摘した。つまり、『昼顔』の婚外恋愛物語は、ある面では結婚後の「純愛」物語として理想的に描かれ、視聴者にも支持される一方で、夫婦の愛情を求めている「サレ」る側の配偶者を裏切り傷つけ、さらに自分が裏切ったがゆえに婚外恋愛相手のことも信じられないというジレンマに陥ることを暗示する、誰にとっても難しく綺麗ごとでは解決できない生々しさに満ちた物語でもあった。

しかしながら、「死」という結末には視聴者からは否定的な意見の投稿が寄せられている。ただし、その理由は大きく二分できる。

1 つは、フィクションだからこそ、「不倫はだめ」だが「2 人には幸せになってほしかった」という「疑似的現実」（坂本 1997: 60）としてのハッピー・エンドへの期待を裏切られたことに対する批判である。そのような投稿者の多くはテレビドラマからのファンとみられ、紗和と裕一郎に共感しており、あくまで俳優によるフィクションだとしたうえで、コンテンツとしての魅力を求めている。その背後には、死による悲恋という「純愛」ブームが 2004 年をピークに落ち着き、2011 年の東日本大震災で多くの死者が出た後、製作者側が意図したような死による「永遠」の愛は、もう共に生きていけないという点で、もはやバッド・エンドでしかないという人びとの意識があるのかもしれない。

次に、死という結末への批判理由の 2 つ目は、不倫はよくないという周知のメッセージだけでは何も「学ぶところ」や「救い」がないことである。この点は、1 点目以上に示唆に富む。夫婦間のコミュニケーションの必要性が意識され、婚外恋愛は社会的注目のなかでもはや他人事でなくなった 2010 年代後半の作品だったからこそ、誰かの死でも単に「運命の 2 人」が再婚ということでもなく、「学ぶところ」や「救い」を視聴者の一部は求めた 。

『昼顔』の結末では、結局裕一郎の死後、離婚届が未提出であったために、形式上依然「妻」であった乃里子のもとに裕一郎の遺体や遺品が渡り、紗和が唯一手にすることができたものであり希望として描かれたものは、裕一郎との子どもの妊娠であった。けれども、視聴者のレビューのなかには、法的婚姻と対比的に愛の結晶や証明として子どもが位置づけられることは、「安直」「安易」であり、仕事もなく父親からの認知もされておらず、まわりに頼る人もいない状況で今後未婚の母として子育てしていくことの厳しさを予期する、非常に現実的な意見もあった。このように、母子家庭の貧困など現代社会の厳しさのなかでは、その場しのぎの結末では本質的な「学ぶところ」や「救い」にはならないのである。

それでは、どのようなかたちで決着することが夫婦関係と恋愛関係という 2 つの関係を含む婚外恋愛をめぐって「学ぶところ」「救い」になるのだろうか。この点について、次節ではここまでみてきた「好きな人とただ一緒にいる」という理想、および自分勝手で自己陶酔になりかねない「純愛」の問題と合わせて、改めて考察していきたい。

4. 〈恋愛伴侶規範〉の再考

4.1『昼顔』が示す手がかり

前節では、『昼顔』は婚外での「純愛」物語としての魅力をもつ一方で、「サレ」た側の苦悩、そして、婚外恋愛の当人も自分が過去に配偶者を裏切ったことで相手を信じることが難しくなるという負の側面をも示すものであったことをみてきた。そのアンビバレンスのなかで、単なる勧善懲悪でもなく、美しい悲恋や夢物語でもなく、現実への示唆となる「学ぶところ」や「救い」を視聴者の一部は求めていた。

そのニーズを満たしうる答えは『昼顔』の結末では描ききれていないものの、その物語からはある手がかりが見出せる。その『昼顔』が示す手がかりとは、3.2 で詳述した、乃里子の唯一の願いであった「離婚後も裕一郎と呼ぶこと」、すなわち仕事仲間としてこれまでの関係を引き継ぐことを紗和が拒絶したシーンにある。本節ではこのシーンを結末につながる重要な分岐点としてとらえ、アメリカの哲学者 Brake（2012=2019）の恋愛と結婚をめぐる議論を援用することで、恋愛結婚をめぐる社会の状況と新たな成人間のパートナーシップのありかたについて理論的に考察していきたい。

以下で展開する本節の議論は平たく言うと、恋愛感情や婚姻の有無によって、成人間の親密な関係を規定することは 2 つの点で不毛であり、当事者の情緒的安定という点で恋愛感情や婚姻の有無による関係の終焉ではなく、状況に応じた新たな関係性の構築が重要だということである。

4.2〈恋愛伴侶規範〉の問題点

第 1 に、離婚や再婚によってそれまでの関係性を完全にリセットすることは、実態にそぐわない場合がある。『昼顔』でも乃里子と裕一郎は、学生時代から 5 年以上の付き合いがあり、今後も仕事で顔を合わすことがありえた。離婚を決めたとはいえ、2 人は一時配偶者として、すれ違いや価値観の違いはあっても「裕一郎」「ノリ」と呼び合い、親密な関係を築いていた。離婚話が進展しても、否、離婚話が進んでからのほうが気負いなく談笑する様子が見て取れることからも、友人や職場の同僚として関係を継続することは可能だろう。近年の家族研究では、離婚後に子どもの親として新たな関係性を築くことの重要性やその事例が着目されているが（野沢・菊地 2021）、子どもの養育に限らず離婚後に性愛関係とは異なる点で何らかの関係を継続・再構築することは十分ありうる。

しかし、先述のとおり『昼顔』の物語では裕一郎の新たな伴侶として紗和が乃里子と裕一郎の関係の継続を拒絶するさまが描かれた。それまでのシーンで婚外恋愛「サレ」る側の苦痛が描かれたことも相まって、この拒絶の描写からは成人間の親密な関係を一対の恋愛関係・夫婦関係に限定・特化させることによってこそ、情緒的な安定が得られるという前提が明らかである。第 1 の観点として述べたように、その規範的な前提が実態にそぐわない場合があるということだけでなく、第 2 の観点として、純粋な愛情にもとづく一対のカップル・夫婦関係を志向する規範性自体の問題を考える必要がある。

この点を考えるうえで、Brake の議論が示唆に富む。Brake が詳述するように、近代西欧的価値観のもとで結婚は道徳化され、愛にもとづく男女の排他的二者関係が社会的法的に望ましいものとして価値づけられ、制度化されてきた（Brake 2012=2019）。Brake は、「結婚および性愛的に愛し合う関係を特別な価値がある場所とみなすこの不均衡な焦点化と、ロマンティックな愛が普遍的な目標であるという想定」を〈恋愛伴侶規範〉と概念化し、ほかの結婚・恋愛関係以外の成人間の関係の価値を軽視しうると批判した（Brake 2012=2019: 157）。

上述のとおり『昼顔』で視聴者の共感を誘う「純愛」物語としての理想像は、「理由もなく好きな人とただ一緒にいたい」という全人格的かつ永続的なつながりに結婚を当てはめる、まさに〈恋愛伴侶規範〉的なものである。1990 年代以降、結婚後であっても夫婦生活に愛情を求めるロマンティック・マリッジ・イデオロギーが広がり（谷本・渡邉 2016）、夫婦間で「愛し愛される実感」を求めることはもはや「当たり前」のこととされつつある（大瀧 2002）。

しかし、その関係は好意や恋愛感情を重んじるがゆえに、ときに身勝手なものとなり、理由もなく相手となる対象

が変わる可能性も含んだ不安定なものである。さらに、その関係性において「理由もなく好きな人」と「自然に」関係に至るような愛情の「自然さ」「純粋さ」が強調される場合、つまり、〈恋愛伴侶規範〉が普遍的で自明・自然なものとして強調される場合、相手と関係を構築するという発想に至りにくく、紗和と裕一郎のように思慮の浅さやコミュニケーション不足に陥って「他者を傷つけない」どころか自分も相手も傷つきかねない。

とくに、『昼顔』において紗和が乃里子の願いを拒絶した前後の流れをふりかえると、3.2 でみたように紗和は裕一郎を信じられない不安から乃里子の願いを拒絶することで、裕一郎との絆を守ろうとするさまが描かれた。また、乃里子も恋愛感情にもとづいた結婚を重視するからこそ、「裕一郎」と呼び続けてよいか紗和に尋ね、それが拒絶されれば「北野くん」と呼び方を変えた。けれども、そのような紗和と乃里子の〈恋愛伴侶規範〉に準じた行動について、やや鈍感で不器用な人物として設定される裕一郎は彼女たちの意図に気づかないまま物語が進んだ。それゆえ、裕一郎は乃里子との離婚・紗和との再婚をめざす点で〈恋愛伴侶規範〉に即してはいるものの表層的であり、紗和が期待していた「好き」や「愛している」と彼女にはっきり伝えることを先送りにし、逆に乃里子には理由もなくただ紗和が好きであると伝え、乃里子の心の傷を抉る様子が描かれていた。要するに、紗和・乃里子は〈恋愛伴侶規範〉を尊ぶからこそ結果的に不安や葛藤状態に陥り、婚外恋愛関係の要である裕一郎も〈恋愛伴侶規範〉が壁となって、紗和と乃里子のニーズをとらえきれなかったことが示されている。

4.3 広義のケアの視点にもとづく成人間の親密な関係

このような〈恋愛伴侶規範〉にもとづく関係構築に代わる方途として、Brake は成人同士の親しい関係を広義のケアの視点でとらえることを提案する。Brake は家事・育児・介護といった狭義のケア概念ではなく、「ケアの倫理」の理論家 V. Held（2006）にならい「大事にすること、誰かを気にかけること、世話すること、その人のニーズに応えて福利を促進すること」（Brake 2012=2019: 146）という広い意味でケアをとらえ、成人間では対等な関係として生じうるものと論じている。Held によると、広義のケアとは個人の人格的特性に帰せられるものではなく、関係性であり実践としての側面に注目すべきものである（Held 2006: 52-3）。したがって、本稿で示すケアの視点も多様な関係構築の実践のなかで人びとの意識・行動の両面で高めていけるものとして想定する。

この視座をもとに『昼顔』の物語をみると、紗和が裕一郎を信じられないという不安は、乃里子を排除することによって解消されるのではなく、紗和と裕一郎との関係性において信頼構築のためのニーズを共有しケアされるべきことであったといえよう。そして、車を暴走させることになった終盤の乃里子の描写もまた、乃里子の「サレ妻」としての苦悩を癒しながら、裕一郎と乃里子も時間をかけて新たな関係を築く必要があったことを示唆している。

さらに、〈恋愛伴侶規範〉的な関係構築からケアの視点にもとづく関係構築への転換をめざすためには、プライベートな関係をめぐる第三者および社会の役割についても看過できない。なぜなら、「ケアの倫理」は公的領域と私的領域に二分された社会構造自体を問うものであるからだ（Held 2006: 9）。『昼顔』では基本的に婚外恋愛を批判する人物や社会のまなざしが多く描かれ、紗和たちと関わる警察や弁護士もサポートと呼べるほどの働きはなさないことが示されていた。それは社会規範から逸脱した婚外恋愛だからと思われるかもしれないが、実際のところドメスティック・バイオレンスにしても性暴力にしても児童虐待にしても、私的領域での問題は顕在化しにくい現状がある。

もちろん、これらの生命の危機に直結しうる問題と婚外恋愛を同等に並べることはできない。ただ、夫婦・恋愛関係は家族の基盤や成人間の情緒安定化機能を担う関係として重視されてきたにもかかわらず、「夫婦喧嘩は犬も食わない」と一般に表現されることもあるように、その悩みや問題を相談または支援する、まとまった存在や機会は現代日本社会では乏しい。離婚手続きにおいても当事者の話し合いによる離婚届の提出という協議離婚の形式が約 9 割を占めるが、関係が破綻した当事者が対等に話し合うことは容易ではないとされる（二宮 2005）。

欧米では、カップル・セラピーやカップル・カウンセリングの日常的な活用が社会的にも学術上の議論としても一定確立されており、日本でも社会や「世間」が「不倫」をバッシングしたり、あるいは個人のプライベートの問題とただ見て見ぬふりをしたりするだけではなく、何らかのかたちで日常的にありうる親密な関係の問題をサポート

していく手段を模索してもよいのではなかろうか。先述した Brake は結婚制度そのものを廃止するのではなく、〈最小結婚 minimal marriage〉として成人間のケア関係を法的・社会的に保障していくことを構想する（Brake 2012=2019）。

ロマンティック･ラブのもととなった中世ヨーロッパの騎士道的恋愛や宮廷的恋愛もある種の婚外恋愛であったが、それは結婚では社会・経済的な要素が優先されるなかでの限定された関係に過ぎなかった（井上 1973）。しかし、現代において単なるロマンスではなく、日常生活におけるメンタルな満足やアイデンティティの基盤として「愛し愛されること」や「ただ好きな人と一緒にいる」ことが志向されるなかでは、他者を排除し誰が「純愛」の対象となりうるかを問うよりも、Brake が示すように成人間の多様な情緒的つながりの可能性を認め、そのなかで広義のケアの視点から皆が配慮しあう関係を築く方途をめざすほうが 1 つの「学ぶところ」や「救い」になるのではないだろうか。

5. おわりに――制度から愛情へ、愛情からケアへ

本稿では、2010 年代半ば以降の婚外恋愛への社会的注目のなかでヒットした『昼顔』の物語に着目し、その背後にある恋愛結婚をめぐる人びとの意識との関連のなかで、その物語にはどのような意味が読み取れ、そこからどのような夫婦・恋愛関係についての課題や展望が考えられるかについて論じてきた。『昼顔』の婚外恋愛物語にも依然として愛情や好意を抱く相手を人生の伴侶とすることへの志向性が読み取れることを明らかにし、その志向はときにメンタルな満足やアイデンティティの維持といった成人の情緒的安定のための経路を阻害するという逆説的な問題を指摘した。

その議論を通じていえることは、『昼顔』の婚外恋愛物語とそのヒットは、近代化に伴って結婚が制度的なものから愛情関係へと移行して以降、夫婦関係に期待されてきた愛情による成人間の情緒安定化機能を個人レベルでも社会レベルでも問いなおす 1 つの契機だということである。山田は、本来身体的興奮を伴う情緒現象としての恋愛と親族・家族システムに属する結婚は社会的制度としてのレベルが異なるものの、近代において「結婚の要請と恋愛の要請をうまく調和させた」かたちが「恋愛結婚」であるとみる（山田 1989: 102）。つまり、〈恋愛伴侶規範〉も個人の欲求と社会秩序の保全の両立という目的のために維持されてきたといえる。

しかし、それは婚姻率が高く、多くの人びとが就職・結婚・出産という標準化されたライフコースを歩む時代だったからこそ安定的で有効な規範であり、同時に離婚や婚外恋愛、同性愛、既婚女性の就業キャリア継続、非婚などの「標準家族」からの逸脱を許さないものでもあった。その「標準家族」における主婦のやるせなさや夫婦関係のありようへの疑問を一部示した物語として、先行研究では『金曜日の妻たちへ』が着目されてきた（落合 2000; 山田 2005 など）。

その後、男女雇用機会均等法や男女共同参画社会基本法が施行されて久しい今日では、『昼顔』の物語における乃里子のように女性が結婚後もキャリア継続をめざすことも往々にしてある。また、紗和や乃里子のように、当初の結婚相手とは別の道を歩むこともめずらしくはない。そのような結婚をめぐる社会状況の変化のなかで、完全な方途は示しきれなかったにせよ、Brake が〈恋愛伴侶規範〉と理論上概念化した現状の限界や矛盾を、『昼顔』はリアリティのある物語として一般に暗示したのである。そのことが視聴者の賛否両論を招き、社会で話題となった一因かもしれない。

この『昼顔』への社会的関心を単なる一過性のものとせず、本稿で示した〈恋愛伴侶規範〉の打開を示唆する 1 つのしるべととらえ、今後はより現実に即したかたちで広義のケアの視点での成人間の豊かな関係性構築のありようやそのための課題を明らかにしていかなければならない。

［注］

1）婚外恋愛は一般に「不倫」と呼ばれるが、本稿ではより学術的かつ価値中立的な用語として「婚外恋愛」と表現する。また、

論点を絞るために本稿の婚外恋愛の定義では、恋愛感情を有する特定の相手との金銭の授受を伴わない継続的な関係に限定し、より一時的なニュアンスが強い「浮気」や、性産業の利用およびいわゆる「ワンナイト・ラブ」のような一夜限りの身体的な関係は除外する。

2）〈amatonormativity〉は、訳書では同性婚論争や異性愛規範性（heteronormativity）との関連を重んじて「性愛規範性」と訳されているが（久保田 2021）、本稿ではこの概念で想定される関係性が排他的かつ人生の伴侶として保護・理想化される点を明示するため、および他者に恋愛感情を抱かない「アロマンティック」、恋愛対象を 1 人に限定しない「ポリアモリー」をめぐる議論を念頭に「恋愛伴侶規範」（夜のそら：A セク情報室 2020）という和訳を用いた。

3）ただし、2021 年は 6 作品中 4 作品（『じゃない方の彼女』『ただ離婚してないだけ』『にぶんのいち夫婦』『うきわ――友達以上、不倫未満――』）がこれまで婚外恋愛ドラマをほとんど放映してこなかったテレビ東京系列のもので、どれも 23 時以降の深夜帯である。2020 年までは複数の放送局が視聴者が多いプライムタイム（19 時～ 23 時）にも婚外恋愛ドラマを放送していたことと比較すると、2021 年は作品数が多いとはいえ、特筆して婚外恋愛ドラマがブームになったとはいいがたい。

4）元データが公開されていなかったため、下記の記事を参照した。
株式会社 MANTAN，2014，「昼顔：上戸彩主演の不倫ドラマ 最終回 16.5% 今期 2 位で有終の美」，まんたんウェブ，（2014 年 9 月 26 日付け記事）（2021 年 12 月 10 日取得，https://mantan-web.jp/article/20140926dog00m200002000c.html）。

5）ただし、現在は削除されており閲覧できない。

6）全体では 2021 年 9 月 18 日時点で評価平均は 3.3 点（5 点満点）で投稿数は 391 件である。『昼顔』の場合、そのほかの主要映画クチコミサイトでいえば、「Yahoo! 映画」では、同時点で評価平均 3.29 点（5 点満点）、投稿数は 722 件であった。同じく「Filmarks」では 3.3 点、7638 件であった。レビュー投稿の分析が主眼の場合ほかのデータを用いる可能性もあるが、本稿ではあくまで視聴者による物語の受容の参考とするため、大手クチコミサイト「価格 .com」の系列で、他サイトに比べてレビューし慣れた利用者が多いことが想定され、物語の具体的なシーンやセリフを挙げながら丁寧にレビューしている投稿が多い「映画 .com」のデータを用いることとした。

［文献］

阿部孝太郎，1997，「テレビドラマの構造分析・序説――その方法と意義を中心に」『マス・コミュニケーション研究』50: 127-39.

赤川学，1999，『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.

Brake, E., 2012, *Minimizing Marriage: Marriage, Morality, and the Law*, New York: Oxford University Press.（久保田裕之監訳，2019，『最小の結婚――結婚をめぐる法と道徳』白澤社.）

フジテレビ，2017，「イントロダクション」，『昼顔～平日午後 3 時の恋人たち～』公式サイト，（2017 年 12 月 25 日取得，https://www.fujitv.co.jp/hirugao/introduction/index.html）.

Held, V., 2006, *The Ethics of Care: Personal, Political, and Global*, New York: Oxford University Press.

五十嵐彰，2018，「誰が『不倫』をするのか」『家族社会学研究』30(2): 185-96.

岩男壽美子，2000，『テレビドラマのメッセージ――社会心理学的分析』勁草書房.

今泉容子，1998，「不倫の日本映画」『文藝言語研究 文藝篇』筑波大学，34: 85-128.

井上俊，1973，「恋愛結婚」の誕生――知識社会学的考察」『死にがいの喪失』筑摩書房，172-99.

一般社団法人日本映画製作者連盟，2018，「2017 年興行収入 10 億円以上番組（PDF）」一般社団法人日本映画製作者連盟ホームページ，（2021 年 12 月 18 日取得，http://www.eiren.org/toukei/img/eiren_kosyu/data_2017.pdf）.

Jamieson, L., 2004, “Intimacy, negotiated non-monogamy and the limits of the couple.” J. Duncombe, K. Harrison, G. Allan, & D. Marsden eds., *The State of Affairs: Explorations in Infidelity and Commitment*, Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., 35-57.

久保田裕之，2021，「『最小の結婚』読者の皆様へ――『二刷付記』全文公開」，白澤社ブログ，（2021 年 12 月 18 日取得，https://hakutakusha.hatenablog.com/entry/2021/03/18/171121）.

国広陽子，2012，「第 2 章　テレビ娯楽の変遷と女性――テレビドラマを中心に」国広陽子・東京女子大学女性学研究所編『メディアとジェンダー』勁草書房，65-107.

草柳千早，2011，『〈脱・恋愛〉論――「純愛」「モテ」を超えて』平凡社.

中村隆志，2014,「第 1 章　ときめきの波――恋愛ドラマとケータイの歴史」中村隆志編『恋愛ドラマとケータイ』青弓社，17-60.
年代流行，2021,「歴代ドラマ視聴率ランキング」，年代流行ホームページ，（2021 年 12 月 18 日取得，https://nendai-ryuukou.com/article/026.html）.
二宮周平，2005,「家族法におけるジェンダー課題」『国際女性』19: 85-92.
野沢慎司・菊地真理，2021,『ステップファミリー――子どもから見た離婚・再婚』角川書店.
岡室美奈子，2017,「極私的テレビドラマ史」木原圭翔編『大テレビドラマ博覧会――テレビの見る夢』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館，6-37.
大瀧友織，2002,「夫婦間に生ずる問題とその変遷――『人生案内』の分析をとおして」『年報人間科学』23(2): 359-79.
落合恵美子，2000,『近代家族の曲がり角』角川書店.
パッハー・アリス，2019,「2000 年代のセックスレス現象を日本の男性誌・女性誌はどう描いているのか――解消法に注目して」『文学研究論集』明治大学大学院，50: 147-67.
坂本佳鶴恵，1997,『〈家族〉イメージの誕生――日本映画にみる〈ホームドラマ〉の形成』新曜社.
谷本奈穂，2008,『恋愛の社会学――「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.
谷本奈穂・渡邉大輔，2016,「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考――恋愛研究の視点から」『理論と方法』31(1): 55-69.
東宝ステラ，2017,『昼顔』東宝株式会社映像事業部.
筒井淳也，2008,『親密性の社会学――縮小する家族のゆくえ』世界思想社.
山田昌弘，1989,「『恋愛社会学』序説――恋愛の社会学的分析の可能性」『年報社会学論集』2: 95-106.
――――，2005,『迷走する家族――戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣.
夜のそら：A セク情報室，2020,「恋愛伴侶規範（amatonormativity）とは」，note，（2021 年 12 月 15 日取得，https://note.com/asexualnight/n/ndb5d61122c96）.
湯浅幸代，2005,「『純愛ブーム』と『ノスタルジー』」『物語研究』5: 112- 4.

おかだ　くみこ　1995 年生まれ　大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程。2022 年 4 月より日本学術振興会特別研究員（DC2）。
主な論文
「夫婦の情緒性に潜むジェンダー非対称性をめぐる理論的視座の検討――近代家族論を手がかりとして」『家族社会学研究』第 34 巻第 1 号，2022 年.